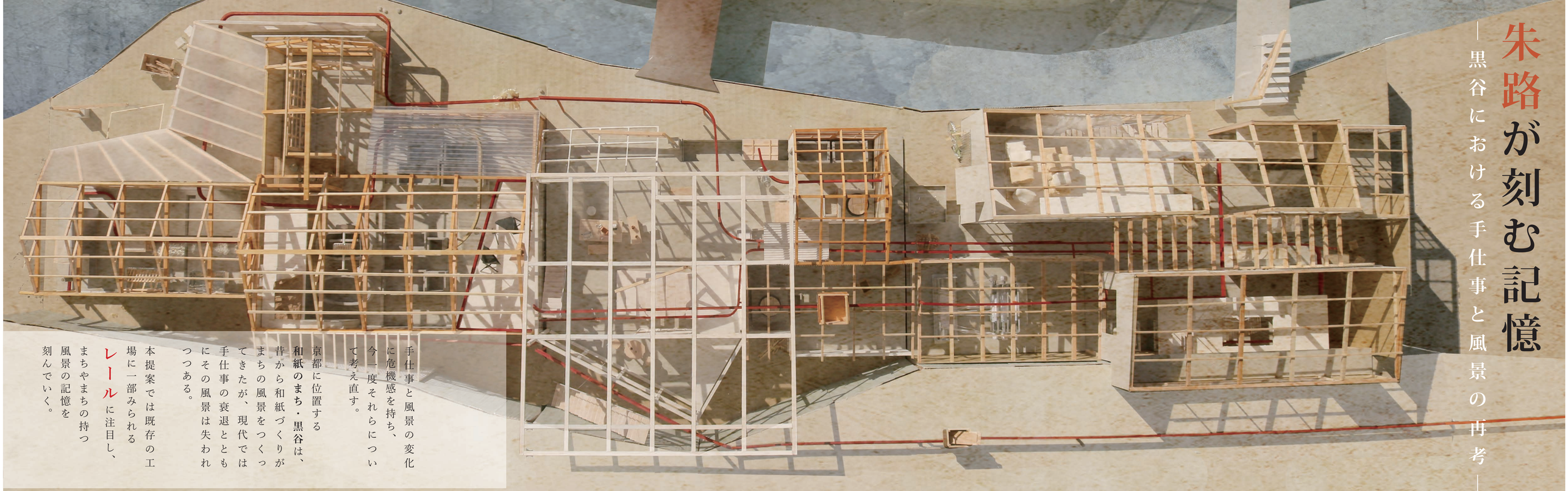
朱路が刻む記憶

―黒谷における手仕事と風景の再考―



手仕事と風景の変化に危機感を持ち、今一度それらについて考え直す。

京都に位置する**和紙のまち・黒谷**は、昔から和紙づくりがまちの風景をつくってきたが、現代では手仕事の衰退とともにその風景は失われつつある。

本提案では既存の工場に一部みられる**レール**に注目し、まちやまちの持つ風景の記憶を刻んでいく。

和紙のまち・京都府黒谷では、手仕事がまちの風景をつくってきた。

01 背景

手仕事と風景への危機感

見慣れたまちが整えられて変わっていく事への消失感や、自分の知らないところで手仕事が失われていく焦燥感というのは、どちらも日本のアイデンティティ消失への危機感である。手仕事はその土地の風土や気候に由来している事から、風景と大きく関わっている。都市がシステム化され、無駄なものが排除されている中、そういった手仕事から成る土着的で多様性を持った風景について考え直す時期であると考える。

手仕事を守ること＝風景を守ること

仕事と風景の変化に危機感を持ち、その行く末についてを考察する。

02 敷地

和紙のまち黒谷

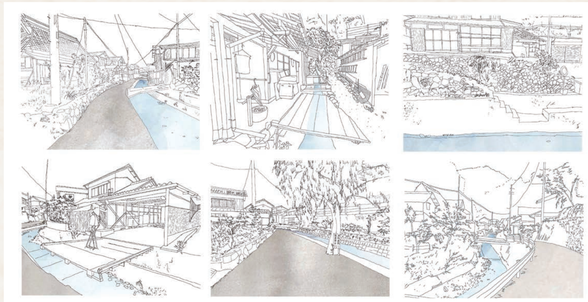
京都府綾部市に位置する黒谷では約800年前からまち全体で紙づくりが行われていた。長い間まちを支え、風景そのものとなっていた和紙の生業も、他の和紙の産地と同様に衰退してきている。小さな黒谷川を中心に約33軒の民家が立ち並ぶ小さなまちである。川と近しい生活や、民家ひとつひとつに伸びる橋の風景が独特で、まちが和紙づくりに従事していた痕跡がいまだに残る。

現在、黒谷は京都の無形文化財に指定されているが、それがより一層和紙づくりの発展を妨げているのも事実である。

03 コンテクスト

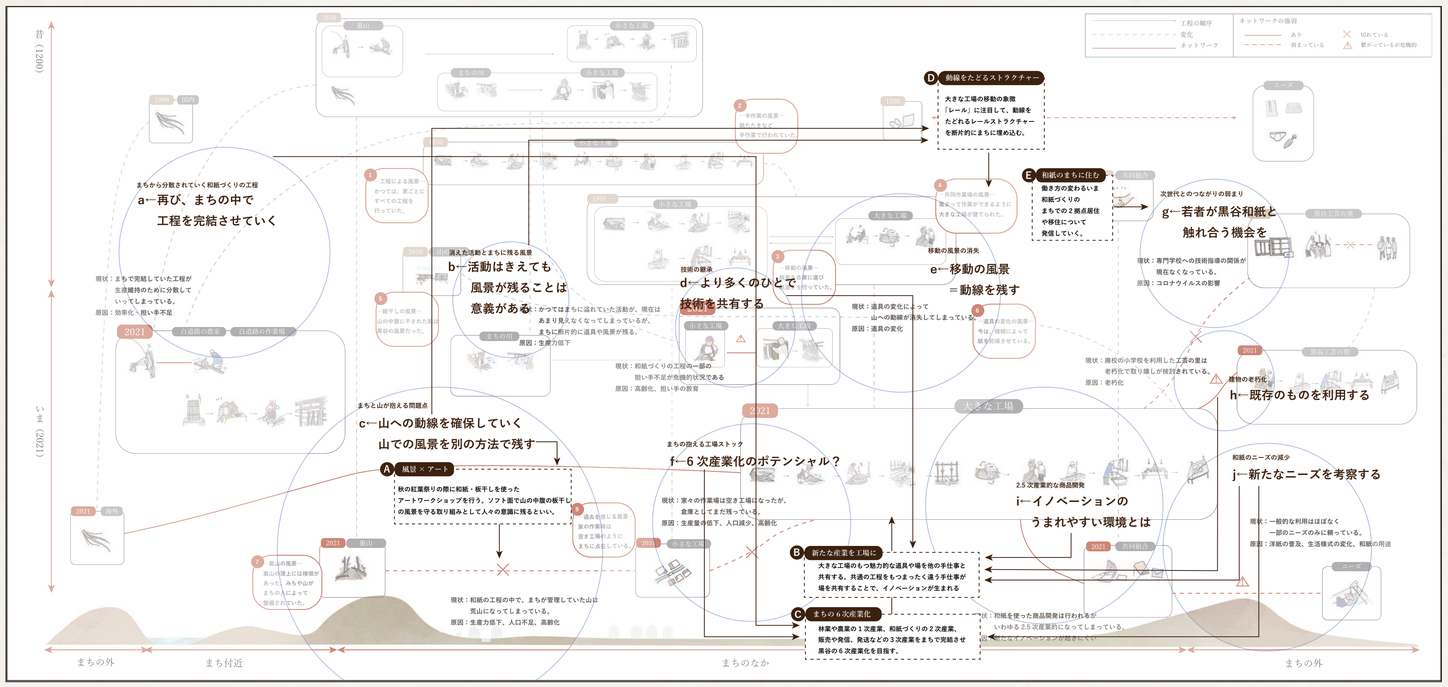
黒谷の紙づくりの変遷と6次産業化のポテンシャル

黒谷のまちを歩くと、各家に一軒程度倉庫のような空間がみられる。これは、かつての家庭での紙漉き場の名残である。紙づくりがまちで完結していた歴史から、黒谷では6次産業化のポテンシャルを有する。



04 設計手法

ネットワーク図を用いた問題点と提案のあぶり出し



05 提案

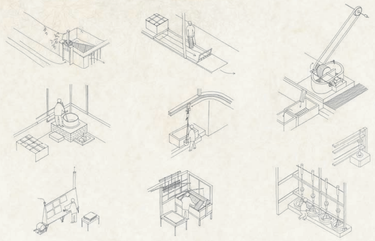
レールでまちをつなぐ

既存の工場では
重い紙素のバケツを紙漉き場の舟に運ぶために
作業の動線に合わせてレールが湾曲し走る
↓レールが「共有」の手がかりになり得る

共同作業場である大きな工場

手仕事のシェアオフィスによる
場と道具・技術の共有の提案

大きな工場には、魅力的な道具や場が存在する。
建築の下には川から直接引いた水が流れる。
この場所・道具・技術を産業同士で共有する。



空き工場の改修

大きな工場とレールが連続する
発送の拠点

レール①
裏になってしまっている道を復活し、板干し場と工場をつなぐ

レール⑤
板干しを立てかけるのにレールが使われる

山の中腹の板干場

アートワークショップによる
風景の継承

レール④
川によって裏になってしまった民家にものや人を届ける

川の横断

川によって行き来が分断されたまちをレールでつなぐ

空き工場ストックの活用

秋の工程の拠点

レール②
間伐材を運ぶトロッコで裏山と動線を守る

楮畑への山道

山とみちを守るレール

レール③
原料の楮を運ぶトロッコが、秋の工程の拠点まで伸びる

山の頂上の楮畑

農業の再生

06 設計

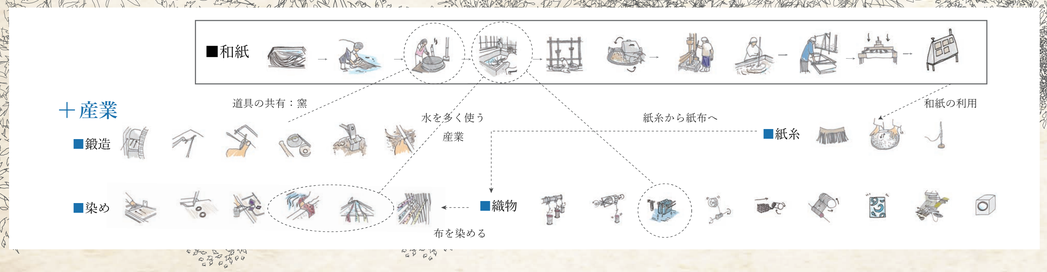
産業の集まる手仕事のシェアオフィス

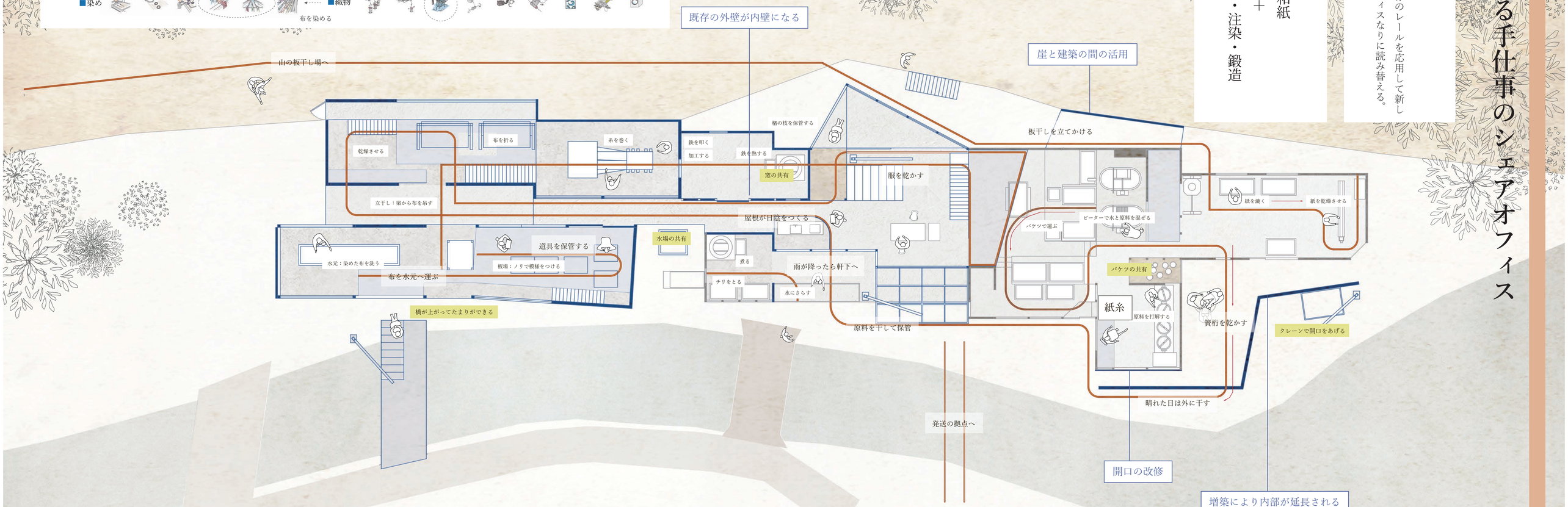
■共有のレール

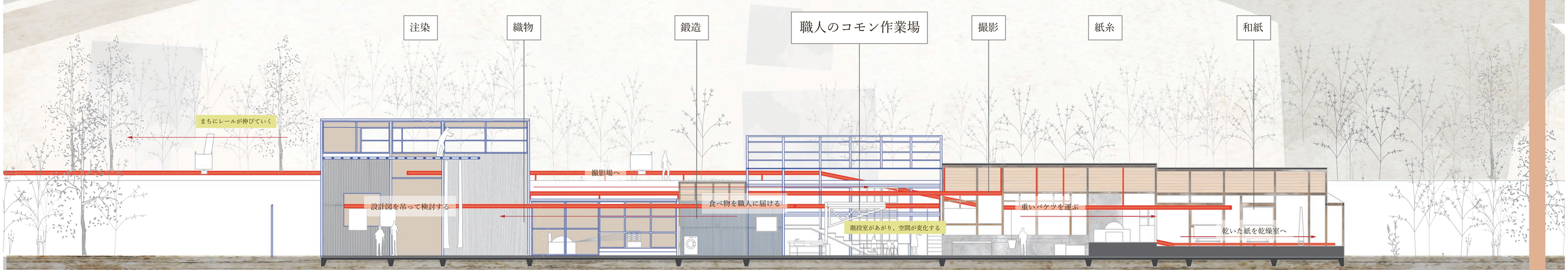
シンボリックな既存のレールを応用して新しい手仕事のシェアオフィスなりに読み替える。

■加える産業

和紙
＋
織物・紙糸・注染・鍛造





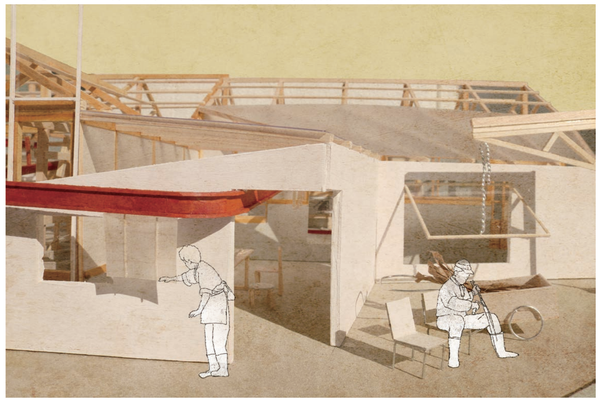


メインの提案・共同作業場の改築

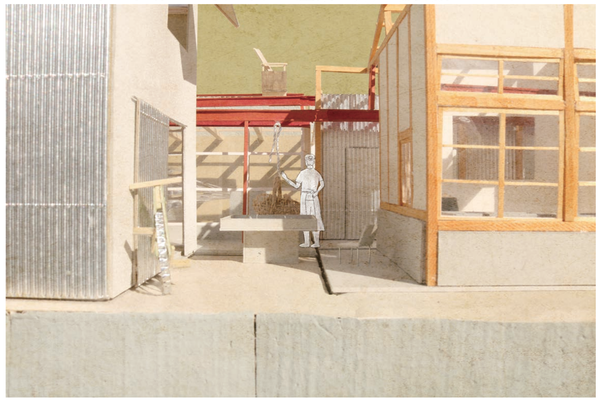
産業同士で 場・道具・技術 を共有する手仕事のシェアオフィスの提案

レールは
工場内を使い方が
変化しながら巡り
やがてまちへと
伸びていく・・・

既存の工場の外に外壁を挿入し、内部の延長・川との関係性を生む



みんなの水場ではそれぞれの産業の井戸端会議がおこる

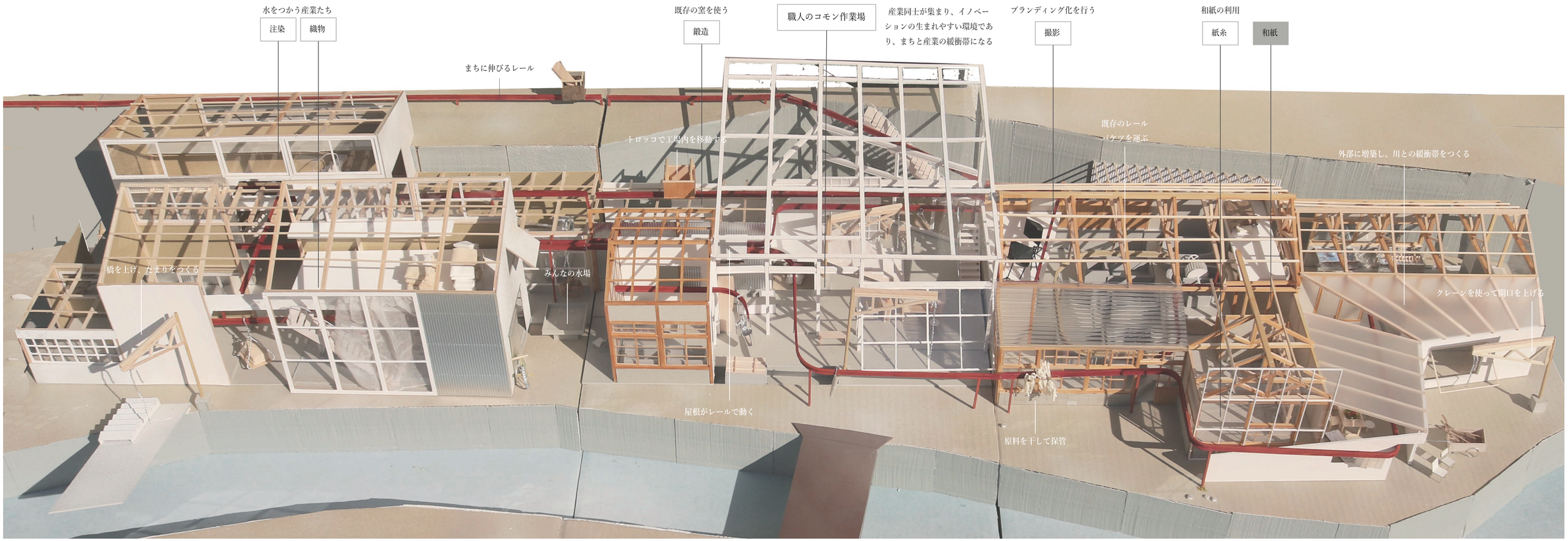


工場の中を通るトロッコはブランディング化の撮影場へと向かう

内外が流れ込むつくりの増築部は、レールと視線で新旧つながる

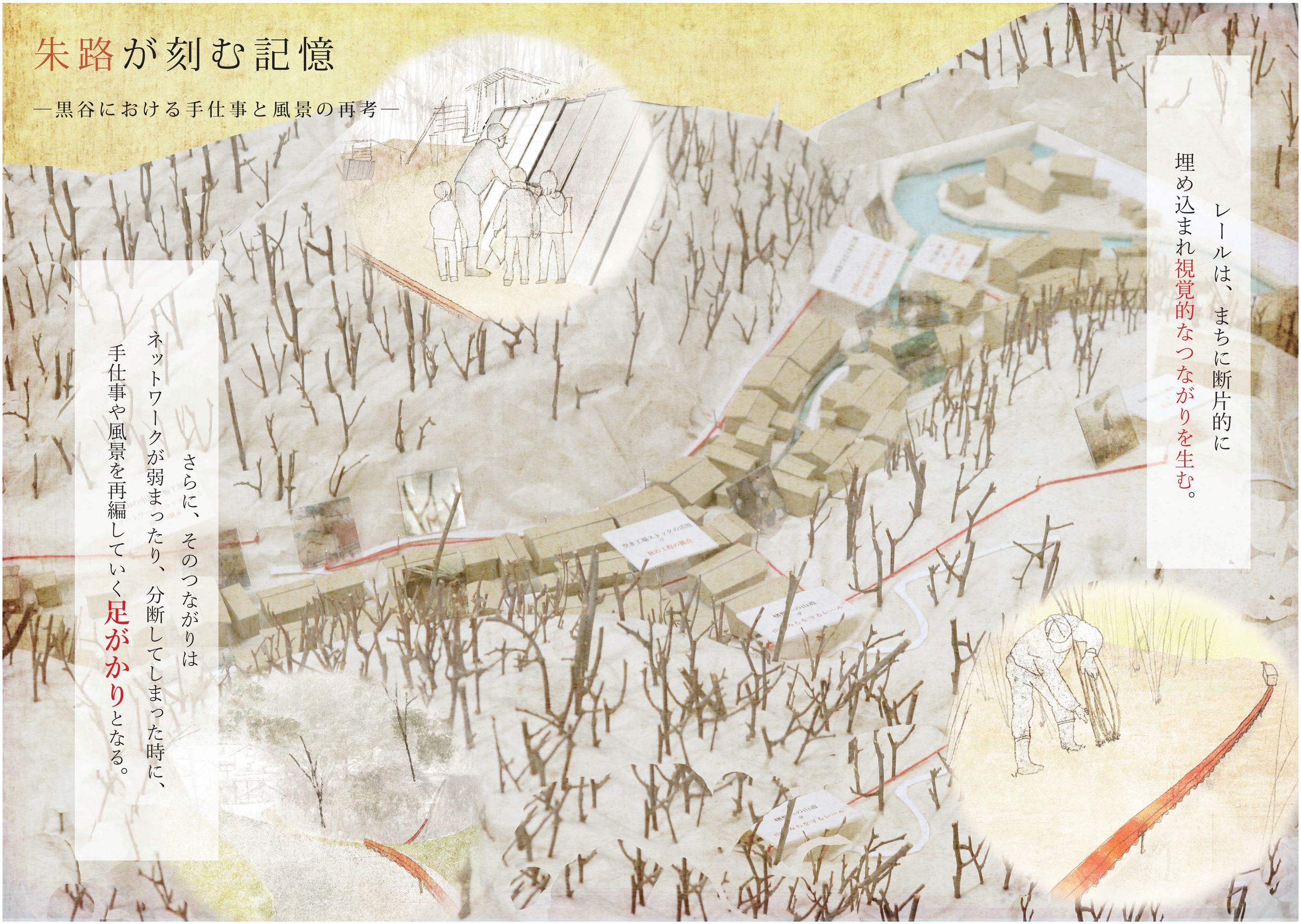
レールは建築の外にも巻きつくように伸び、原料などを干して保管する

橋があがって川と建築のあいだにたまりをつくる



朱路が刻む記憶

―黒谷における手仕事と風景の再考―



レールは、まちに断片的に
埋め込まれ視覚的なつながりを生む。

さらに、そのつながりは
ネットワークが弱まったり、分断してしまった時に、
手仕事や風景を再編していく**足がかり**となる。